

澤井一彰著

## 『オスマン朝の食糧危機と穀物供給：16世紀後半の東地中海世界』

山川出版社，2015年11月，253頁，定価5,000円（税別）

熊倉 和歌子  
KUMAKURA Wakako

現在では、水供給が人の手によって操作されるとともに、季節によらない室内栽培や農薬散布による虫害の予防、食糧の長期保存の技術が確立されているが、それでもなお、社会は自然環境の変化にさらされている。近代以前においては、今よりも自然環境の影響を直接的にうけたことは疑いようがない。ひとたび、気候や水供給に負の変化が起これば、人々は農業生産やそれに伴う食糧不足、食糧価格の上昇に悩まされたのであった。それでは、そのような時代の食糧供給はどのように担保されていたのであろうか。また、政権は人々への食糧供給＝生命の維持にどのように関わったのであろうか。食糧不足が地中海一帯で観察された16世紀後半を対象として、オスマン朝史研究の見地からこの問題に取り組んだのが、本書である。

本書は、著者である澤井一彰氏が、2010年に東京大学人文社会系研究科に受理された博士学位申請論文『16世紀後半の東地中海世界における穀物問題とオスマン社会：イスタンブルへの食糧供給を中心に』をもとに、加筆修正をおこなったものである。本書の構成は下記の通り。各章の内容については、すでに齋藤寛海氏による詳細なまとめがあるので（齋藤 2016）、ここでは章ごとの要約は割愛する。代わりに、本稿では、社会経済史における本書の意義や本書が提示するこれからの課題について論じていきたい。ただし、本書を真っ向から評論するのは研究の中心をエジプトに置いている評者の能力を超えるため、中世エジプト史との比較、あるいは評者が現在寄せている関心から論じることになることをお許しいただきたい。

- 序論 オスマン朝史研究と新たな「地中海世界」像
- 第I部 16世紀後半におけるオスマン朝の食糧事情とイスタンブル
  - 第1章 「食糧不足の時代」とオスマン朝の食糧事情
  - 第2章 イスタンブルへの人口流入とその対応策
- 第II部 オスマン朝の穀物流通システムと東地中海世界における「穀物争奪戦」
  - 第3章 イスタンブルにおける食糧不足と穀物供給
  - 第4章 穀物問題にみるオスマン朝と地中海世界
- 結論 つながる地中海世界，隔たる地中海世界

本書は、「オスマン朝史研究の枠組みにおいて、16世紀後半におけるオスマン朝社会の実相を、小麦をはじめとする各種穀物と、それを取り巻く諸問題に焦点を絞ることによって具体的に明らか

\* 早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手  
Research Associate, Organization for Islamic Area Studies, Waseda University

にすること」(4頁)と、フェルナン・ブローデルが提唱した「地中海世界」という枠組みを、オスマン朝の側から再検証すること」(6頁)の二つの目標を掲げ、枢機勅令簿から得られる穀物供給に関する個別の事例を抽出することにより、当該時代のオスマン朝イスタンブルにおける食糧供給のあり様を描く。他方で、著者の謙虚さゆえであろうか、その「実相」を明らかにすることがどのような意味をもつかについては、ブローデルの積み残した地中海の東部地域の状況を明らかにすること以上の言及はない。しかし、著者の“共同研究者”であるブローデルが『地中海』を執筆してから現在にいたるまで、社会経済史においてはさまざまな分析概念や枠組が試みられてきており、本書にはブローデルの「地中海世界」を補うこと以上の意義がある。そこで評者の観点から、本書が学界に寄与する点を述べたい。

本書が学界に寄与する点は、第一に、それがオスマン朝の公権力、市場、民衆の関係をとらえるうえで、文書資料に基づく詳細な情報を提供することである。中世イスラーム史における公権力、市場、民衆の関係をめぐっては、「モラル・エコノミー」の観点から分析された研究があり、本書はその比較軸の一つとなる豊かな情報をもつ。「モラル・エコノミー」論は、エドワード・P・トムソンがその概念を用いて18世紀イングランドの食糧騒動を研究して以来、社会経済史における重要な分析概念の一つとなった(Thomson 1963)。オスマン朝以前のエジプトを対象とした社会経済史研究においてモラル・エコノミー概念を用いた研究は、1990年代以降、ボーズ・ショシャンや長谷部史彦らによるカイロの食糧騒動研究から出発し、先行研究の一角をなしている。そのなかでも長谷部は、カイロの物価上昇時に、スルターン政権が公定価格の強制を避け、市場への自発的な物価高の収束を求める「神の価格」なるものが存在したことを指摘する(長谷部 2004)。

本書が示す穀物供給量の調整は、オスマン朝政府が直接的かつ強力に働きかけているようにとらえられ、この点において、自制的な価格上昇の踏みとどまりが市場における価格決定のメカニズムの一つとして機能していたマムルーク朝カイロの事例と大きく異なることがわかる。これに関して、本書は次のような比較研究の視座を与えてくれるであろう。まず、16世紀後半にみられたオスマン朝政府による食糧供給への積極的かつ直接的な関与という点は他の王朝や時代と比較してどのように位置づけられるのか。そして、その背景にある政治的思想や倫理・思想的変化の問題である。管見の限り、豊富な蓄積を誇るオスマン朝史研究におけるモラル・エコノミー研究は意外なほど少ない。とりわけ史料の制約が多い近代以前を対象とした研究のために、本書が果たす役割は大きい。

第二に、オスマン朝における食料供給網の一端を明らかにした点である。アラン・ミハイルは、オスマン朝史家によるイスタンブル偏重を批判して、オスマン朝領内にはカイロやメッカなど複数の中心があることを主張した(Mikhail 2011)。彼が主張するように、オスマン朝領内には大小さまざまな「中心的な」都市があった。そして、それらとその後背地、また中心同士を結びつけるさまざまな方向の食糧供給ベクトルが存在し、網の目(ネクサス)を構成していたと考えられる。その全体像を描出することはオスマン朝史研究の課題の一つであるが、広大な領土を擁するオスマン朝における食料供給網を明らかにするのは容易ではなく、地道な個別研究が積み上げられていく必要がある。本書はその一つとして位置づけられる。

また、食料供給網の問題は、オスマン朝における都市と地方の相互関係の問題にも深く関わる。トムソンの研究によれば、穀物の欠乏時における穀物の生産地外への輸送は、地域の人々の反感を買い、しばしば抗議行動を引き起こした。このことは、トムソンが研究の対象としたイギリスに限

ることではあるまい。本書は、地方における食糧需要を背景とした不正輸送の実態を追い、しばしば穀物輸送のベクトルが、政府が企図するものとは異なる方向に向くことがあったことを示しており、興味深い。このように、本書は「食糧供給主義」に基づく食糧供給の実態を、地方における人々の駆け引きと政府の対応の双方向の交渉を詳らかにすることによって描いている。

また、本書はヴェネツィアをはじめとする諸国への密輸を取り上げ、王朝の枠組みを越えた取引の実態を明らかにしている。同時代のヴェネツィアの食糧問題と穀物補給については、この問題をヨーロッパ側の史料から検証した齋藤寛海の研究（1989; 2002）があるが、本書によって、当事者双方の側の史料からこの問題を検証することが可能となったのである。

次に、今後の展望への期待を込めて、惜しまれる点を二つほどあげておきたい。第一は、近年の環境史研究との接合の問題である。オスマン朝の環境史研究で先駆的な存在であるホワイトは、16世紀以降の寒冷化と、それがもたらした食料供給システムの崩壊、そしてそのなかで現れたジェラールの諸反乱の関係性を示した（White 2011）。環境変動と社会変動の相互作用を過度に結びつけて論じることには注意しなくてはならないが、ある地域の農業生産だけではその地域の人口を養うことができない状況下においては、その一因となっている環境変動が社会に大きな影響を与えたことは疑念を挟む余地がない。ホワイトの研究は、一見大胆な議論を打ち立てているようにも見えるが、社会と自然環境の相関関係を丁寧に検証しており、説得力をもつ。本書とホワイトの研究は、目標は異なるものの、用いる史料やそこに至るまでの道筋は共通するものが多く、互いを補強し合うような関係にある。本書がこの研究を環境史の最新動向として紹介するととどめ（17頁、43頁注7）、その内容に踏み込んでいないのは惜しい点である。

自然環境については、本書においても、第1章で中世温暖期以降の寒冷化について丁寧に説明されており、著者がこの時代の環境の変化に強い関心を払っていることがわかる。しかし、第1章では気候変動が16世紀に起こった地中海一帯での食糧不足を引き起こした一因であったことが述べられる一方で、この気候変動がイスタンブルの食糧不足といかに関わるかについては明示的ではない。むしろ、著者は、イスタンブルの場合は人口増加、地方の場合は気候的要因が食糧不足をもたらしたのだとして、それぞれを異質のものとして扱っている（136-137頁）。果たして、これらの現象を異なるメカニズムのものとして扱うことは妥当なのであろうか。例えば、人の動きに着目すれば、地方において食糧危機がおけると地方から都市に人が流入し、それによって都市において食糧不足や物価高騰が引き起こされるといふ現象は、すでに指摘されている（長谷部 1989）。本書の第2章1節において、イスタンブルに移住した人の多くがチフトボザン（農地を放棄した人）であったと述べられていることから、気候変動を背景にした地方における食糧不足と、イスタンブルにおける食糧不足はやはり密接に関係していたのではないか。

第二に、本書の出発点に戻り、「地中海世界」はどのような広がりをもつ地域なのかという問題を投げかけたい。「地中海世界」はどこからどこまでをその範囲とし、何がその「世界」を規定しているのだろうか。無論、評者も「地中海世界」の一部としてみなされるエジプトに身をおく研究者であるので、ブローデルや著者が言うところの「地中海世界」の感性的・記号的意味合いについては理解できる。しかし、それを研究上の概念として指定する場合には、ある段階で論理的説明が必要になるのではないか。本書の目標の一つとして、「改めて地中海世界という概念の妥当性を地中海の東部地域から、すなわちオスマン朝の側から捉えなおしてみたい」（7頁）と述べられてい

るように、著者もこの問題を意識している。これに対し、終章では、「自然環境や地理的条件など、ブローデルがいう「構造」あるいは「ほとんど動かない歴史」のレベルにおいては、地中海の西と東とに非常に共通した現象がほとんど同時に進行していたことを再確認することができた。この意味において、やはり地中海世界はひとつのまとまり、あるいは一体性をもった「世界」であったといえよう」(249頁)という見方を示す。しかし、自然環境が共通する地域をただちに「世界」と言い換えることにはやや抵抗を感じざるを得ない。「世界」を規定するものは、むしろ人間の関係性や共同意識ではないか。

他方、経済活動という点では、「オスマン朝政府の穀物流通政策と不正輸送や穀物密輸との激しいぶつかり合いにみられるような、地中海世界の東部に特有の動きが数十年にわたって確認された…地中海世界の東部地域が黒海や紅海をあわせたオスマン朝による支配のもと、緩やかな「東地中海世界」をかたどり…地中海の西部地域とは異なる諸条件のもとで活発な経済活動を営んでいた…」(249頁)としている。しかし、例えば、密輸が報告された地域の8割以上をルメリ州とエーゲ海沿岸部が占めている(228頁図25)ことを考慮すると、それを果たして「東地中海世界」や地中海の東部地域の動きとして一括りにできるか疑問が残る。

ブローデルの「地中海世界」論の再検討は、ホーデンとパーセルがその共著書のなかで試みており、示唆的な議論を提示している(Horden and Purcell 2000, またそれを説明したものとして加藤2004)。彼らは、地中海世界を構成する地域社会をマイクロ・エコロジーとし、そこに内在する「希少性」を介したマイクロ・エコロジー間の相互依存関係をコネクティビティとしながら、「地中海世界」はコネクティビティの集合によって形成される世界であるとした。本書の終章で述べられている上記のまとめは、ホーデンとパーセルの理論的説明のなかに収まるように思える。著者は、本書が明らかにした事柄をもって、ホーデンとパーセルの「地中海世界」論をどのように書き換えるのであろうか。今後、上述の先行研究を踏まえながら、「地中海世界」たるものは何か、また他の地域的なまとまりとは何が違うのかという問題に対する著者の見解が明らかにされることを期待したい。

以上、専門外の立場から、関心の赴くままに私見を述べてきたが、本書は主史料である枢機勅令簿の残存状況により対象年代が限られているなかで、詳細な記録を拾い集め、オスマン朝が16世紀後半に直面していた食糧危機の問題とそれに対してとられた政策、食糧供給に関わった人々や諸手続きのあり方などの具体的な事柄を明らかにした労作である。上述したさまざまな問題の発展に寄与しうることこそ、本書が一次史料を丹念に読み込んだ重要な基礎研究であることを証明していよう。

#### 参考文献

- Horden, P. and N. Purcell 2000: *The Corrupting Sea: A Study of Mediterranean History*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Mikhail, A. 2011: *Nature and Empire in Ottoman Egypt: An Environmental History*, New York: Cambridge University Press.
- Shoshan, B. 1980: "Grain Riots and the 'Moral Economy': Cairo, 1350–1517," *The Journal of Interdisciplinary History*, 10–3, 459–478.
- Thompson, E. P. 1963: *The Making of the English Working Class*, London: IICA. (エドワード・P・トムスン 2003: 『イングランド労働者階級の形成』市橋秀夫、芳賀健一(訳)、青弓社。)

- White, S. 2011: *The Climate of Rebellion in the Early Modern Ottoman Empire*, New York: Cambridge University Press.
- 加藤博 2004: 「イスラーム市場社会の歴史的構造」三浦徹他(編)『比較史のアジア: 所有・契約・市場・公正』イスラーム地域研究叢書4, 東京大学出版会, 183-206.
- 齋藤寛海 1998: 「16世紀ヴェネツィアの穀物補給政策」『地中海論集』12, 53-61.
- 齋藤寛海 2002: 『中世後期イタリアの商業と都市』知泉書館, 2002.
- 齋藤寛海 2016: 「澤井一彰著『オスマン朝の食糧危機と穀物供給: 16世紀後半の東地中海世界』」『史学雑誌』125-11, 81-89.
- 長谷部史彦 1989: 「14世紀エジプト社会と異常気象・飢饉・疫病・人口激減」柴田三千雄他(編)『歴史における自然』シリーズ世界史への問い1, 岩波書店, 57-82.